

# スタジオ夜話

第 156 スタジオ夜話

## 番外編予告

### ☆はじめに

ゴールデンウィークも終わりました。いよいよ梅雨の季節になります。最近では地球温暖化の影響か？各地で豪雨など異常気象が発生して酷いことになる傾向にあります。「備えあれば憂いなし」皆様も安全を第一に梅雨を乗り切ってお過ごしください。さて今回からスタジオ夜話番外編の新シリーズとして「サウンドコンテンツ制作のための全て！」魅力溢れる音創りのために。のお話をします。スタジオ夜話では長くこの番外編でサウンドドラマ（ラジオドラマ）制作のお話をしてきました。今回のシリーズはそのまとめとしたお話です。サウンドコンテンツ制作にたずさわる多くのクリエイターの一助になれば幸いです。今回はその序章です。

### 序章

#### ☆書籍のご紹介

一冊の書籍をご紹介します。「放送の台本と演出」初版（昭和 45 年）著者：並河 亮 石崎書店 B6 サイズ 413 ページの本です。オリジナルは 1958 年昭和 33 年に出版された「ラジオテレビの台本・演技・演出」（三芽書房）のもので、筆者は 45 年に出版されたもので学習しました。当時私たちが世の中のことを知るための媒体は紙媒体（新聞に代表される）と電波媒体の二つしか存在しませんでした。今日では考えられないことです。オリジナル昭和 33 年出版の「ラジオテレビの台本・演技・演出」のタイトルはテレビの文字が先頭ではなくラジオの文字が先頭に記載されています。これはテレビの初放送（本放送開始日）が 1953 年（昭和 28 年）2 月 1 日（NHK）なので執筆当時は電波媒体の主流はラジオだったためです。この書籍は筆者が学生時代、放送関連のコンテンツ制作で基礎知識を得るための教科書でした。また当時、多くのコンテンツ制作者のバイブルとまで言

われた書籍です。著者の並河 亮 氏は島根県に生まれた英米文学の研究者です。東京大学法学部卒、NHK 国際部、毎日放送などを経て後に日本大学の教員（文学博士）となりました。筆者の恩師です。並河 亮 氏の出版物は非常に多く、ジャンルも放送・文芸・美術・歴史・ジャズ評論・等々と多岐にわたっています。中でも長年にわたり世界中を廻り遺跡の研究などを行い 1966 年（昭和 41 年）に出版された『神を訪ねて三万キロ』（毎日新聞社刊）はインド、チベット、ネパール、中東、エジプト、中南米（マヤ・インカ遺跡）、アフリカなど、まさに「三万キロ」を超える調査研究のドキュメンタリーでした。この書籍を基にドキュメンタリー番組がいくつか放送されています。仏教、イスラム教、キリスト教、そして各地の精霊信仰（アニミズム）などの現場を紹介したものです。出版年 1966 年（昭和 41 年）はビートルズが来日した年でした。やっとカラーテレビが普及し始めたころです。この取材調査研究は当時としては驚くべき内容だったのです。また並河氏は毎日放送で多くのラジオドラマなども制作し「放送の台本と演出」で紹介もしています。晩年のドキュメンタリー「三日月の町」毎日放送（TV）ではニューオリンズでブルース、ジャズのルーツを紹介するなど放送文化にも多大な影響を与えた人物です。今回の「サウンドコンテンツ制作のための全て！」は並河 亮 氏に書籍「放送の台本と演出」で教わったことを基本に、あらためて「サウンドコンテンツ」制作のお話をしたいと思います。一冊の書籍をご紹介します。筆者のベースとなる一冊の教科書です。現在でも読者皆様の一助になるかもしれません。機会がありましたら是非ご一読ください。

#### ☆サウンドコンテンツの芸術性などはさておいて……

この番外編では芸術論的なお話はしません。芸術作品といえば絵画、彫刻、音楽な

どに代表されますが現代では「なんとかアート等々」とその呼び方も数多くあり何が芸術作品なのかすら不透明だからです。そしてここで話をする。「サウンドコンテンツ」についても同様のことが言えると思います。例えば音楽というジャンルに括っても古典から現代、近代、民族、……と数え上げればきりがありません。いっそ一括りに「サウンド・アート」と呼べばいいのでしょうか？それすら疑問です。

話はかわります。映画にはアカデミー賞というものがあります。賞は細分化されていて作品賞から録音や撮影に関する部門まで多岐にわたります。

映画の賞は世界中に数多くあります。音楽の賞もたくさんあります。サウンドコンテンツ、特に「サウンドドラマ」（ラジオドラマ）の賞は……

かつてわが国では文化庁が主催する芸術祭というものがありません。現在もありません。昨年令和 7 年は 80 回記念でした。現在「サウンドドラマ」（ラジオドラマ）はテレビ・ラジオ部門の中でその他多くの参加作品の中で審査されます。ラジオドラマ全盛の頃は素晴らしいドラマ作品が多数大賞を獲得しました。勿論今日でも優れたドラマ作品が多数ありますがラジオドラマ部門というカテゴリーは無くなってしまったようです。

また他にも日本放送作家協会主催の「創作ラジオドラマ大賞」というものもあります。これは純粋にラジオドラマ対象です。NPO 法人放送批評懇談会が主催する、テレビ・ラジオの優秀番組や個人を顕彰する権威？ある賞「ギャラクシー賞」もあります。日本民間放送連盟賞というものもあります。しかし現状を見れば「サウンドドラマ」（ラジオドラマ）などコンテンツそのものの存在がこうした様々な賞の推移をみるだけでも危ぶまれている

ことが理解できます。この衰退していく原因は制作に手間暇をかけることができない。予算が膨大になる。制作技術に熟知し

た人材がない。などが主たる理由です。実際に筆者が制作したドラマCDはドラマCDとはいえ格安？予算で直接費、間接費あわせて1作品100万円ぐらいで制作していました。現在のFM放送番組制作費は1時間あたりのドラマ以外の番組では直接費せいぜい数万円程度でしょう。放送局は人にも資材（設備）にも膨大な資金が必要です。直接費にはそんな予算は無いのです。そのためにのんびりと（失礼）ラジオドラマなど創っている余裕なんて無いのが現状です。芸術作品？は放送事業的には向かないのです。また仮に「サウンドドラマ」（ラジオドラマ）の芸術性云々を問えば、ドラマ自体が文学作品であり、単に伝える媒体が音（放送）であるというだけのこと、そのテーマなど原点は文学表現であるというところに起因しているのもその一面にはあります。つまり放送は芸術的でなくとも問題は無いのです。ラジオのコンテンツ制作で音楽は演奏の中継や収録で、自らが制作することはありません。音楽は音楽家が創るものであり現状の放送コンテンツ制作スタッフが創るものではありません。ここがサウンドドラマ（ラジオドラマ）と一線を画すところ。言い換えれば「サウンドドラマ」（ラジオドラマ）作品は文学としての優劣が作品の優劣を決定すると言っても間違いではなく、また創るのは「基となる本の執筆」であり、放送コンテンツ制作スタッフが創るものではない。その後「音」（放送）として伝えるために手を加え完成させるところが。今まで番外編でお話した「サウンドドラマ」の制作のお話です。文学作品を書籍という媒体ではなく、音媒体でより面白く等々「伝える手法」のお話でした。勿論例外的な作品もありますがしかし基本的な考え方は間違っていない。かつて放送作家の「西沢実氏（西澤 實、にしざわ みのる、1918年（大正7年）1月2日[1] - 2013年（平成25年）7月2日[1]）日本の放送作家・劇作家。」が筆者に語ったラジオドラマを書くにあたっての前提が、

「文学としての脚本」執筆が最重要。またその世界（ラジオドラマ）はアバンギャルドの世界でもアンチテアトルの世界でも無いと言い切っていたのを思い出します。はじめに紹介した並河 亮氏もラジオドラマと文学の関係性でその「原点は文学作品」であり伝達手段が放送という媒体であると言及していました。したがって「サウンドドラマ」ラジオドラマの芸術性は文学作品的にその価値観を問うのが正解なのです。そして「サウンドドラマ」ラジオドラマの制作技法は文学作品を「音」で伝えるための技法を解説するものです。

### ☆天才と秀才、普通の人は「作法」を習え

ゴッホ、ゴーギャン、ダビンチ、モーツァルト、ベートーヴェン、アインシュタイン、・・・（順不同・無作為）と過去を振り返れば多くの天才が存在しました。現在でもノーベル賞に代表される天才がいます。天才と秀才との違いは天性の才能を持つ者と秀でて優れた能力を有した者の違いです。筆者のような普通の人は努力すれば（現在に至ってもまだ普通の人ですが）秀才に一歩近づける可能性はあります。しかし多くの人がこの当たり前のことを理解していません。日本放送作家協会が作家教室を開催しています。様々な劇団が養成所を持ってもいます。声優教室もあります。ここで学習？をすれば優れた作品が生み出せるのでしょうか？断言します。錯覚です。こうした養成機関全ては作品創りの作法？を教える所なのです。「作法」です。古今東西を問わず多くの様々なジャ

ナルの作家たちは持てる才能を活かし作品を世に送りだしてきました。川端康成、村上春樹はどここの教室や養成所にも通ったことはありません。確かに春樹氏は早稲田の文学部で演劇専攻でしたが作家としての教育？を受けたわけではありません。川端康成氏も同様です。東大の文学科出身ではありますが作家としての教育を受けたわけはありません。元々お二方は類まれな才能（天性の物）の持ち主だったのです。環境がその才能を開花させたのかもしれない。

一方で様々な努力をして才能を磨き上げた人物も多くなります。最近話題となった真田広之氏が良い例だと思えます。彼は子供時代の「劇団ひまわり」にはじまり千葉真一のジャパンアクションクラブに所属、堀越高等学校を卒業。日本大学芸術学部映画学科に入学。在学中もチャンバラ好きの彼は殺陣同志会に在籍していました。近年のアメリカTVドラマ『SHOGUN 将軍』ではエミー賞をはじめ数々の賞を受賞しています。彼は役者であり、プロデューサーであり、作家であり監督もこなすスーパー努力家の秀才です。普通の人も学習や努力を積み重ねることによって、彼の業績を例にとれば優れた作品を創ることが可能だとも言える訳です。

天才と秀才、普通の人の違いはここにあるのです。では「サウンドコンテンツ制作のための全て！」魅力溢れる音創りのため

**ハイビジョン放送・災害・報道・海外派遣**



**<SATCUBEアンテナの特長>**

- 47cm x 30cm x 5.5cmビジネスバッグに入ります！
- SCPCモデル・Sat-Qモデル・各種あり
- 災害/報道/海外派遣映像音声伝送インターネット接続/ハイビジョン伝送可能
- わずか1分で通信可能組立不要・工具不要
- 衛星補短は内蔵ディスプレイのアシスト機能で素早く簡単
- 航空機持込可能バッテリーで運用可（約3時間運用可能）
- 運用中のバッテリー交換可（ホットスワップ対応）
- モバイル中継装置（TVU・Live U・スマテレ等）と連携可

**SATCUBE**

「驚愕の超小型平面アンテナ！」

スタンダードなSCPCでのSNGモデルに加え2020年7月に新しくスタートしたスカパーJ SAT社の新サービス「Sat-Q」モデルもラインナップ。お客様の運用にマッチした利用が簡単にできます。放送などのHD映像伝送・災害通信・海外通信・企業のBCP向けなど幅広く利用可能です。

**AI Communications k.k. エーティコミュニケーションズ株式会社**

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-55-14  
TEL: 03-5772-9125 <http://www.bizsat.jp>

# スタジオ夜話



緑の中を  
空に向かって  
鯉のぼり

「も

屋根より高い  
葺の波と  
集合住宅で生まれ、  
育った子どもたちには、  
意味がわ  
からないだろう。

にはどんな人材が作品創りを目指すのでしょうか？。生み出す作品の優劣はそのテーマを匠に作品の中に内包させることが重要なのですが、その内包させるための作品の創り方は教室や養成所等では教えてはくれませんが、しかし放送作家教室からも優秀な作家が育っています？そうですこの方たちは元々才能があったのです。一匹狼でも才能とチャンスがあれば世の中に作品をだすことができます。教室や養成所はそのチャンスを得る一つの環境ではあります。有料ですが環境を手に入れること自体については否定しません。教室ではないのですが筆者も一時放送作家協会に席を置いていたことがあります。才能の問題ではありますが秀逸な作品はおろか放送に値するドラマなど一本も書けませんでした。普通の人なのだと思えます。しかし普通の人でも様々な経験を積めば「作法」ぐらいのお話ができます。ぐらいといっても「作法」はとても大切なものです。茶道などは「作法」の中にその本質を感じ取るもので、ひとつのセレモニーの流れの中で、もてなす側と受ける側とのコミュニケーションが生まれます。茶の湯というセレモニーがひとつの作品であるとするならばそこには互いに感じ取ることができるテーマもあります。作品がそこで成立しているのです。天才と秀才は別とし

ても「サウンドドラマ」(ラジオドラマ)制作者この「作法」を知る人のこと。「サウンドドラマ」(ラジオドラマ)創りの作法は学習できます。学習と経験は無駄では無いと思えます。

## ☆「サウンドドラマ」(ラジオドラマ)創りの「作法」とは？

作法とは辞書によると元々仏教用語で法要儀式や行住坐臥「ぎょうじゅうざが」日常の基本動作などの行儀を定められた法に従って行う所作法式を作法ということだそうです。私たちがよくいうマナー(礼儀作法)のことではありません。僧侶はどんな時でも(寝ている時でさえ)修行である、という考え方に基づいたものです。「サウンドドラマ」(ラジオドラマ)創りの作法は、創り手は「音」を扱う時はどんな時でも修行であると心得、真摯に取り組む。また先人たちの知恵に耳を傾け新たな課題に挑戦し守るべき礼法をより一層意味あるものとする。この「作法、礼法」を今までの言い方言えば「サウンドドラマの制作技法」(ラジオドラマ)となります。例えばスタジオ夜話的には出演者に QUE を出すのにも作法があり、単にタイミングの問題では無い、QUE ボタンを押して LED を点灯

させるのは仕事の領域で作品を創る作法では無いという、なかなか訳の分からないものなのです。(後略～) こうした作法についても機会をみてお話しします。

## ☆次回は

今回はこれから始めるスタジオ夜話番外編の予告？でした。タイミングを見ながらお話しして行こうと思っています。よろしくお願いたします。

さて次回は「今ならまだ間に合う昭和の音創り」のお話です。先人たちの知恵に耳を傾けてみてください。今日かつて効果音制作などに使われた機材は概ね最新のデジタル機器に置き換わりました。それらは非常にクオリティーの高い優れた機器です。しかし音創りは敢えて質を落として音を扱う場面もあります。デジタル音源でも当時の8bit音源の音は現在の機材では作ること非常に難しいのです。「音」創りの世界は「聴いてなんぼ(何程)」の世界です。今ならまだ間に合います。昭和のエフェクターなど当時の機材を大切に後世に伝えて行きましょう。というお話をします。お楽しみに！

— 森田 雅行 —